

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00898

研究課題名（和文）自己決定理論を用いた異文化経験が英語学習に与える影響

研究課題名（英文）Effects of intercultural experiences on English learning: An analysis using self-determination theory

研究代表者

田中 佑美（Tanaka, Yumi）

滋賀大学・教育学系・准教授

研究者番号：00345448

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本縦断的研究では、異文化経験が英語コミュニケーション能力と動機づけへ与える影響を検証した。その結果、海外滞在経験がある児童群が常に高い英語コミュニケーション能力を有していることが明らかになった。内発的動機づけについては、5年次には、海外経験（滞在・旅行）を有する児童群が、海外経験がない児童群より高い動機づけを有していたが、その差は6年次には消えていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の意義は、小学校の英語教育において、異文化経験に関わる教育的示唆を得たことにある。具体的には、英語コミュニケーション能力の向上には、海外滞在経験が有効であり、どのような形態で児童が異文化経験を有するかが重要となる。一方で、内発的動機づけには、滞在や旅行といった経験の形態に関わらず、海外経験を有することで効果が見込まれる。ただし、児童が内発的動機づけを長期間維持することが難しいことも本研究から明らかになったため、定期的に異文化経験が感じられる活動をカリキュラムに取り入れる必要性を指摘することができた。

研究成果の概要（英文）：This longitudinal study investigates effects of intercultural experiences on English communicative competence and motivation. The findings revealed that pupils who had lived overseas consistently achieved high English communicative competence. Regarding intrinsic motivation, pupils with overseas experiences (living and travel) displayed higher intrinsic motivation than those with no overseas experiences in Grade 5, but this difference disappeared when they were in Grade 6.

研究分野：英語教育学

キーワード：自己決定理論 異文化経験 英語コミュニケーション能力 動機づけ 小学生

### 1．研究開始当初の背景

近年、子どもを対象とした英語教育において、英語コミュニケーション能力や動機づけに関心が集まっている。とくに、小学生を対象とした学年比較の先行研究からは、英語コミュニケーション能力は学年と共に向上し（バトラー・武内, 2006）、内発的動機づけは学年と共に低下する傾向が指摘されてきた(Carreira, 2011)。このような潮流のなか、日本の国際小学校において、日本語を母語とする児童の内発的動機づけは学年が上がっても低下しないことが明らかになっている(Tanaka & Kutsuki, 2018)。これら研究動向を踏まえて、本研究課題では、子どもの海外経験という異文化経験が英語コミュニケーション能力と英語学習に対する動機づけをどのように変化させるかを明らかにする。

### 2．研究の目的

本研究の目的は、小学生を対象に、海外経験が英語コミュニケーション能力と動機づけに与える影響を検討し、教育的示唆を提示することにある。具体的には、異文化経験として、海外経験を滞在群と旅行群に分類し、海外経験のない群との比較から英語コミュニケーション能力と動機づけの変化を考察する。さらに、異文化経験による英語コミュニケーション能力と動機づけへの影響を保護者が気づいた具体例から明らかにする。

### 3．研究の方法

#### 分析 1

分析 1 では、異文化経験が、児童の英語コミュニケーション能力と動機づけに与える影響を検討する。研究協力者は、関東圏の公立小学校 3 校に通う 5 年生である。調査は、2018 年 7 月（5 年次）と 2019 年 7 月（6 年次）に各小学校において担任の協力を得て実施された。また、保護者には、書面を通じて説明を行い同意を得た。欠損値がある個票や母語が日本語以外の個票をスクリーニングした結果、262 名（男子 125 名、女子 137 名）を分析対象とした。研究協力者を異文化経験別に 3 つの群（海外滞在経験がある児童群 32 名、海外旅行経験がある児童群 132 名、海外経験がない児童群 98 名）に分類し、分析を行った。

英語コミュニケーション能力の測定には、英検ジュニアシルバーを使用した。英検ジュニアシルバーとは、リスニングテストであり、聞き取った英語やその返答に○印をつけて回答するテストである(日本語英語検定協会, 出版年不明, p. 6)。英検ジュニアには、ブロンズ、シルバー、ゴールドの 3 つのレベルがあり、中級のシルバーは、3 校の担任の総意にて選定した。2018 年と 2019 年の英検ジュニアのテストは同じシルバーレベルの異なる版を使用した。

動機づけの測定には、自己決定理論(Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2002, 2017)を基盤に作られた先行研究の尺度(Tanaka & Kutsuki, 2018)を使用した。この尺度は、「なぜ英語を勉強しますか」に対して、「英語のことは覚えるのが楽しいから」など 5 件法（「ぜんぜんそう思わない」～「とてもそう思う」）で児童に回答を求める形式になっている。さらに、この尺度は、自己決定理論に基づく 4 側面（内発的動機づけ、同一視的調整、取り入れ的調整、外的調整）を測定することが可能である。

英語コミュニケーション能力の分析には、異文化経験（海外滞在あり、海外旅行あり、海外経験なし）×英検ジュニアの結果（5 年次、6 年次）の二要因混合計画の分散分析を行った。その結果、5 年次に比べて、6 年次の英検ジュニアの結果が高く、海外滞在経験群の英検ジュニアの結果が、海外旅行経験群と海外経験なし群の結果と比較して有意に高かった。

動機づけの分析には、異文化経験（海外滞在あり、海外旅行あり、海外経験なし）×動機づけ（内発的動機づけ、同一視的調整、取り入れ的調整、外的調整）×年次（5 年次、6 年次）の三要因混合計画の分散分析を行った。その結果、5 年次には、異文化経験がある児童群（滞在・旅行）の内発的動機づけが、異文化経験がない児童群の内発的動機づけより高かったが、6 年次には動機づけに群間の差がなくなっていた。詳細を見てみると、海外滞在経験群の内発的動機づけは、5 年次から 6 年次に低下し、同一視的調整と外的調整は上昇していた。海外旅行経験群の内発的動機づけと外的調整は 5 年次から 6 年次に低下し、同一視的調整と取り入れ的調整が上昇していた。

#### 分析 2

分析 2 では、異文化経験による児童の英語コミュニケーション能力と動機づけへの影響を保護者が気づいた具体例から明らかにする。分析 1 に参加した児童の保護者に質問紙調査を行った。質問紙は、2019 年 7 月の調査時に児童を通して保護者に渡してもらい、保護者には調査者に郵送にて回答を返却してもらった。質問紙には、異文化経験に関する質問のほかに自由記述によって外国を経験後の子どもの英語学習に対する変化について気づいたことを記述してもらった。

保護者の自由記述に対して、Steps for Coding and Theorization (大谷, 2007)を参考に分析を行った。大谷(2007)の質的分析と異なり、本研究は量的分析と質的分析を持つ混合分析のため、構成概念には英語コミュニケーション能力、内発的動機づけ、同一視的調整、取り入れ的調整、

外的調整から選択する標準化コーディングを採用した。その結果、保護者の具体例からは、7つの構成概念が抽出された。

#### 4. 研究成果

##### 結果 1

海外経験群(滞在)の英語コミュニケーション能力は常に高かった。つまり、海外経験(滞在)は、児童の英語コミュニケーション能力を高めることが明らかになった。一方で児童の英語コミュニケーション能力は、先行研究(バトラー・武内, 2006)と同様に、5年次から6年次にすべての群において伸びがみられた。

海外経験(滞在・旅行)は、5年次の児童の英語学習に対する内発的動機づけを高めることが明らかになった。しかし、6年次には海外経験の有無による動機づけの差はなくなっていた。

さらなる分析の結果、海外経験群(滞在・旅行)の同一視的調整が5年次から6年次に向上していた。また、海外経験群(滞在)の外的調整と海外経験群(旅行)の取り入乐的調整も6年次に向上していた。一方で、海外経験群(旅行)の外的調整が低下していた。

##### 結果 2

保護者の具体例から、英語コミュニケーション能力として「海外滞在時の英語コミュニケーション能力の向上」、「帰国後の英語コミュニケーション能力の低下」、内発的動機づけとして「英語使用による達成感と内発的動機づけの保持の難しさ」、同一視的調整として「外国人の友達との会話の希望」、取り入乐的調整として「くやしさ」、外的調整として「帰国後の保護者の努力」、「保護者の目標」が示された。

この研究成果は、全国学術雑誌『JALT Journal』44巻1号(2022)に、「異文化経験が英語コミュニケーション能力と動機づけへ及ぼす影響—小学生への縦断的調査」として発表した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Tanaka Yumi、Starling Christopher L.	4. 巻 26
2. 論文標題 The mysteries of bilingualism: unresolved issues	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 International Journal of Bilingual Education and Bilingualism	6. 最初と最後の頁 1146～1148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/13670050.2023.2237638	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanaka Yumi、Kutsuki Aya	4. 巻 27
2. 論文標題 Motivational patterns of emergent and fully bilingual children learning English and Japanese at an international school	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 International Journal of Bilingualism	6. 最初と最後の頁 618～633
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/13670069221113730	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中佑美	4. 巻 44
2. 論文標題 異文化経験が英語コミュニケーション能力と動機づけへ及ぼす影響 小学生への縦断的調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JALT Journal	6. 最初と最後の頁 81～105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTJJ44.1-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田中佑美	4. 巻 69
2. 論文標題 主体的な学びと小学校英語ー自己決定理論を用いた学習指導要領を具体化する試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 滋賀大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 109～114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Yumi Tanaka
2. 発表標題 Raising Children's English Competence: Parental Efforts
3. 学会等名 JALT2023 第49回全国語学教育学会年次国際大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中佑美
2. 発表標題 小学生の学校外学習に関する縦断的研究 異文化経験別の比較検討
3. 学会等名 全国英語教育学会第48回香川研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中佑美
2. 発表標題 家庭学習が英語コミュニケーション能力に及ぼす影響 小学生の異文化経験と保護者のかかわり
3. 学会等名 第21回小学校英語教育学会関東・埼玉大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中佑美
2. 発表標題 英語学習に対する動機づけと家庭学習への効果 小学生とその保護者の調査から
3. 学会等名 異文化間教育学会第 41 回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中佑美
2. 発表標題 英語学習における内発的動機づけと異文化経験
3. 学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中佑美
2. 発表標題 小学生の英語学習に対する動機づけと異文化経験
3. 学会等名 異文化間教育学会第40回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中佑美・久津木文
2. 発表標題 国際小学校における日本語学習と英語学習に対する動機づけ
3. 学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------